

## 論文の和文要旨

論文題目	現代日本語の可能表現に関する研究 — 一段動詞及びカ変動詞「来る」を中心に—
氏名	チョウ レイ 張 麗

本論文は、現代日本語の可能表現のうち、一段動詞及びカ行変格動詞「来る」のラ抜き形（例：「見れる」「来れる」）を考察の対象とし、先行研究の諸観点を検証するとともに、ラ抜き形の表す意味、形態及び構文的特徴などの使用実態を明らかにしようとするものである。

ラ抜き形の使用実態について、従来さまざまな調査研究がなされてきた。しかしながら、それが表す意味、動詞の種類、形態・構文的特徴などについては、まだ十分に明らかになっていないとは言い難い。

本論文では、先行研究で取り上げられていない2つの観点を導入する。第一に、「可能」と「意図成就」という意味の違い、第二に評価的表現の有無である。

本論文では、3種類のデータを用いて、ラレル形と対照しながら、ラ抜き形の使用実態を実証的に考察する。本稿で研究資料として用いる3種類のデータは、インターネット上のクチコミデータ、BCCWJ2009 モニター版の「Yahoo!知恵袋」、漫画の実例データである。

以下、本論文の各章の概略を述べる。

**第1章では**、ラ抜き形の発生時期、発生地域、生成の歴史を整理した上で、ラ抜き形に関する先行研究を論点別に概観し、先行研究の問題点を指摘した。

先行研究では、以下の観点が欠けている。

一つは、可能と意図成就という意味の違いであり、もう一つは評価的表現との共起関係の有無である。

研究資料に、以下のような例文がたくさん用いられている。

- (1) 雨降ってから浮き出る模様は見られないのが残念です。
- (2) 札幌の夜景が部屋から見れてとてもロマンチックでよかったです。
- (3) 画像も見れたのは安心してとても良かったです。(^-^)

従来の研究では、可能の意味の下位類をめぐるラレル形とラ抜き形の使い分けがあるかどうかを考察したものの、両形式の使い分けに加藤（1988）以外、可能の意味の違いが関与しないと結論付けている。上記の例（1）～（3）の可能表現の意味は従来の観点で考えればいずれも可能である。

しかし、本論文では、尾上（1998、2003）に従い、可能表現の表す意味の下位類を可能と意図成就とにわけて考える。上記の例文を尾上（1998、2003）の観点で解釈すると、例（1）の「見られない」は、（意図した行為が実現しなかった）という意味を表し、ラレル形の可能用法である。例（2）の「見れ」は、（意図した行為が実現した）という意味を表し、意図成就用法である。例（3）の「見れた」も、（意図した行為が実現した）という意味を表し、意図成就用法である。さらに、用例（1）～（3）の文中で「残念です。」「とてもロマンチックでよかったです。」「とても良かったです。」というような評価的表現が使われている。

例（1）～例（3）の構成を表すと以下のとおりである。

- 例（1）：<ラレル形（可能用法否定形）+ノ>+（マイナス）評価的表現  
 例（2）：<ラ抜き形（意図成就用法肯定形）+テ>+（プラス）評価的表現  
 例（3）：<ラ抜き形（意図成就用法肯定形）+ノ>+（プラス）評価的表現

この3つの用例を見ると、可能表現においてはラレル形とラ抜き形を問わず、後続する文法形式（構文中の位置）や形態（肯定/否定）、評価的表現との共起関係の有無に偏りがあるように思われる。さらに言えば、用例から、ラレル形の後に準体助詞ノが後続する場合、可能用法否定形で現れやすく、なおかつ評価的表現が後続しやすい傾向があり、ラ抜き形の後に助詞テやノが後続する場合、意図成就用法で現れやすく、なおかつ評価的表現が後続しやすい傾向があるのではないかと予測される。

ラレル形とラ抜き形の使用傾向の差に可能と意図成就との意味の違いが関与するか否かという観点に注目したのは筆者が初めてである。第1章では、ラレル形とラ抜き形の使用傾向の差をめぐって、可能と意図成就という意味の違いや構文中の位置（文のどこにあるのか）及び評価的表現との共起関係の有無に注目する必要性を述べた上で、今後どのような調査研究が必要なのかを述べた。

**第2章**では、今日要請されるラ抜き形の研究をまとめた上で、本論文の調査項目及び本論文で用いる3種類のデータについて説明する。3種類のデータはインターネット上

のクチコミデータ、「Yahoo!知恵袋」、漫画の実例データである。データごとに、その必要性は何か、それぞれのデータを利用する研究目的は何か、各データのメリットとデメリットは何か、を述べる。さらに、それぞれのデータについて、調査対象、検索方法、分析項目を説明する。

**第3章では、3種類のデータに基づいてそれぞれ先行研究の諸論点を検証した。その結果、以下のことが明らかになった。**

年齢について、10代～30代ぐらいの人がラ抜き形とラレル形の使用傾向がほぼ同様であるが、40代以上の世代から徐々にラ抜き形の使用率が減っていくという傾向があるという結果を得ている。また、同世代間に特に若年同世代同士間に最も多く用いられる傾向がある。性別について、クチコミデータからラレル形とラ抜き形の使用傾向の差に性別が関与しないという結果も得ている。話者との対人関係について、ラ抜き形は異世代間の会話より同世代間の会話に多く用いられる傾向がある。異世代間であっても身内で親しい間柄であればラ抜き形が用いられる場合もある。ただし、従来の認識では十分に捉えきれない敵対関係の会話でもラ抜き形が観察された。

動詞の種類について語幹が短い動詞がラ抜き形になりやすく、語幹3、4音節の動詞が観察されたことから、ラ抜き形は語幹の短い動詞にとどまらず、語幹の長い動詞へ使用を拡大していると言える。動詞の活用について、ラ抜き形とラレル形と対照した結果、ラ抜き形は下二段より上二段において多く用いられる傾向が見られた。また、「見る」「寝る」「来る」という3つの動詞のラ抜き形がかなり定着しているということが言える。また、1990年代のMatsuda (1993) と比べて、複合動詞、補助動詞のラ抜き形の使用用例数の増加が見られ、これは時間の経過に基づくラ抜き形の使用範囲の拡大によるものだと言える。

肯定/否定形のどちらで現れやすいかについて、3つのデータからはいずれもラ抜き形は否定形より肯定形で現れやすいとの結果を得た。

主節/従属節のどちらで用いられやすいかについて、3種類のデータからいずれもラレル形よりラ抜き形のほうが従属節において用いられやすいとの結果を得ている。

**第4章では、ラレル形とラ抜き形の使用傾向の差に可能と意図成就という意味の違いが関与しているか否かについて3種類のデータに基づいて考察した。表1に見られるように、3種類のデータのいずれもラ抜き形の意図成就用法の比率がラレル形の意図成就用法の比率より高いことが分かる。ラ抜き形の意図成就用法総用例数が840例でラ抜き形総用例数中22.58%であるのに対し、ラレル形の意図成就用法の総用例数が734例でラレル形総用例数中14.46%である。ラ抜き形の意図成就用法の比率はラレル形の意図成就用法の比率より高い。ラレル形とラ抜き形の使用傾向の差に可能と意図成就という意味の違いが関係しているということを明らかにした。**

＜表1 意図成就用法の使用率＞

	ラレル形の 総用例数	ラレル形の意図 成就用法の比率	ラ抜き形の 総用例数	ラ抜き形の意図 成就用法の比率
クチコミデータA	377	126 (33.4%)	194	83 (42.8%)
クチコミデータB	2102	535 (25.45%)	2191	656 (29.94%)
Yahoo!知恵袋	2217	65 (2.93%)	1108	58 (5.23%)
漫画の実例データ	381	8 (2.10%)	227	43 (18.94%)
合 計	5077	734 (14.46%)	3720	840 (22.58%)

第5章では、ラレル形とラ抜き形がそれぞれ評価的表現と共起しやすい場合はそれぞれ文のどこにある場合なのか、また、両形式に後続する文法形式の偏り及び評価的表現との共起関係の特徴などを明らかにした。

3種類のデータからいずれもラレル形・ラ抜き形が評価的表現を伴う例は文中用法に集中し、さらに、ラレル形よりラ抜き形のほうが評価的表現を伴いやすい傾向が見られた。

第6章では、第5章で挙げている文中・文末各用法（用例数の多い個別用法）について分析をおこなった。本論文では、これらの個別用法に対して、可能と意図成就という意味の違い、形態（肯定/否定）、構文中の位置、評価的表現との共起関係の有無の4つの要素を組み合わせて実証的に考察した。その結果、3種類のデータからいずれも、すべての場合の中でラ抜き形がテ形で意図成就を表す、かつ評価的表現が後続する用例の出現率が最も高い。ラ抜き形は〈意図成就用法+テ+評価的表現〉という構成で多く使用されている。

第7章では、各分析項目に従って、本論文で明らかになったことをまとめた上で、研究史的な流れの中で本論文が占める学術的な位置づけ、すなわち、ラレル形と対照しながら、可能形式の表す意味の下位類（可能と意図成就）、構文中の位置及び評価的表現の後続の有無へ注目したこと、また、可能と意図成就という意味の違い、形態（肯定/否定）、構文中の位置、評価的表現との共起関係の有無の4つの要素を組み合わせて実証的に考察したことの学術的な位置づけについて述べた。